

零丁洋を過ぐ（文天祥）

辛苦 遭逢 一經より 起こる

干戈 落々たり 四周星

山河 破碎して 風 絮を 漂わし

身世 浮沈して 雨 萍を 打つ

皇恐 灘頭 皇恐を 説き

零丁 洋裏 零丁を 歎く

人生 古より 誰か 死 無からん

丹心を 留取して 汗青を 照さん

辛苦遭逢起一經 干戈落落四周星  
山河破碎風漂絮 身世浮沈雨打萍  
皇恐灘頭説皇恐 零丁洋裏歎零丁  
人生自古誰無死 留取丹心照汗青

解説 作者四十三歳の時、元軍に捕えられ、張世傑に元に降伏することを勧める手紙を書く事を強いられたため、この詩を作って自分の胸中を示した。

語釈 ※辛苦 苦しむこと。 ※遭逢 めぐりあうこと。 ※起一經 五經（易經・書經・詩經・礼記・春秋）のうち一經。經書を勉強して進士に合格、仕官したことをいう。 ※干戈 武器を取って戦争に従うこと。 ※落落 寂しいさま。 ※四周星 四か年のこと。 ※絮 柳の花。 ※浮沈 四方に流浪するさま。 ※萍 浮くさま。 ※皇恐灘 はやせの名。舟行の最も危険な所。 ※皇恐 恐れること。 ※零丁洋 海の名。 ※零丁 ひとりぼっちで落ちぶれること。 ※留取 あとに残しておく。 しつかりとどめる ※丹心 真心。 ※汗青 書籍。 歴史。 昔は紙がなかったので、竹を火であぶって青みを去り、虫害を防ぎ、うるしで字を書いたことからいう。

通釈 經書を修めて仕官し、国難に当たっているいろいろな辛苦艱難に合い、たてやほこを取って元軍と戦ったが、失敗の連続ではや四年も過ぎた。 国土は元軍に蹂躪され、柳の花が風に乱れただようようであり、また、自分の身も四方に流浪して、雨に打たれている浮き草のようである。 皇恐灘のほとりでは、国家滅亡の罪を恐れて説き、零丁洋を渡っては、身の零落を嘆くばかりである。 人間生まれたからにはみんな死にいくものである。 どうせ死ぬなら、至誠忠義の心をしつかりと世に残し、長く歴史に輝かしたいものである。